

## さあ 森に行こう！

### ～共に育ち合う～

発表者	安東 裕子（愛真幼稚園）
指導助言	武田 信吾（鳥取大学准教授）
司会者	北尾 宏美（愛真幼稚園）
記録者	福谷 春奈（愛真幼稚園）
	西尾 佳穂（愛真幼稚園）

## 1 発表の概要

### （1） 主題設定の理由

本園では、「あそびの保育」を通し、“生命力、生活力に溢れた元気いっぱい子ども”、“感謝をもって生きる子ども”の姿を目指している。そのための1つとして、自然を身近に感じて触れていくことが大切だと考えている。

愛真幼稚園では、週1回の園外保育があり、自然体験の場に多く出かけている。回数多く出かけることで、ここ数年、長い距離や起伏のある道を元気にたくましく歩く子が増えたり、生き物や植物を発見したり触れるなどして喜んだり、それを共感し合う子がたくさん見られるようになった。

これまで教師一同、園外保育に出かけて自然体験を重ねていく子どもたちの成長を多く目にしてきた。子どもたちがこれまで以上に自然のなかで心と体を開放し、一人ひとりの感性を磨いて欲しいという思いや、もっと思いっきり遊ぶことができる魅力的な場所がどこかにないかと日々強く考えるようになっていった。

そこで、子どもたちの姿、教師の思い、これからの子どもたちの生きる力、自然との触れ合い方を更に深めるために、遊ぶための場所を探し、昨春その場所を決め、開拓を進めてフィールドをつくっていった。子どもたちがそのフィールドの思い思いの場所で気持ちを開放させて遊ぶ姿は、本当に素敵で自然の力はすごいなと感心させられた。

今回、このフィールドが出来上がるまでの、教師の勉強会、子どもたちと一緒に遊んで学んだ事を振り返るとともに、子どもたちが自然の中で伸び伸びした姿になることを願い、この主題とした。

### （2） 取り組みについて

フィールドの場所の選定は、幼稚園からそこまで遠くない場所、歩いてでも行ける場所、こんなところで遊べたら素敵！と子どもたちが遊ぶ様子を思い描き想像し決めた。森の中で遊んだり、自然の中で遊ぶ前に、私たち教師が知っておかなければならないことが多くあったため、響の森の自然解説専門員の岡田珠美さんにフィールドに来ていただいて、一緒に散策をする時間を作った。保護者の方にもフィールドの整備を手伝っていただき、あそびエリアと山登りエリアを作った。

教師が考えたあそび（ターザンロープ、滑り台、斜面登り、ハンモック、網ハンモック）で、「子どもたちが遊んだら楽しそうだなあ～」「初回に子どもたちが遊ぶときに、抵抗なく遊び場に踏み入れることができるように」という思いで環境を作っていった。

### （3） 実践例

《2018年度 年中組「ひみつのもり」実践記録（1回目10/23、2回目10/30、3回目11/21）》

- ◎子どもが準備&用意したもの・・・軍手、手ぬぐい、長袖長ズボン（メールでしらせる）
- ◎園が準備&用意したもの・・・ロープ、布、ハンモック、網、ブルーシート、白い紙、筆、プリンカップ、洗濯ばさみ、海苔の空き箱
- ◎あそびエリアでのあそび・・・ターザンロープ、ブルーシート滑り台、ハンモック、綱渡り、綱ハンモック、ロープで山登り、虫探し、土粘土不思議な形の木探し、倒れている木、冬イチゴ探し、焚火ごっこ

◎それぞれの場所での子どもたちの様子

- ◇ターザンロープ  
(1回目)
  - ・スピードにのっても大丈夫な子たちが挑戦しに来る。
  - ・着地点に太い杉の木があり、止まるときはその木を蹴って止める
  - ・スタート地点が子どもの背よりやや高い位置にあったため、背が低い子は届きにくい。
  - ・スタート地点に教師1人、持ち手をスタート地点に持ってあがるのに1人、つまり2人つくことになり少し手がかかるあそびと感ずるため、改善が必要
- ◇ターザンロープ  
(2回目)
  - ・前回の改善点をふまえる
  - ・スタート地点を低くする
  - ・持ち手に紐をつけて、ひっぱって次の人に渡せるようにする
  - ・流れができると子どもたちだけでできるようになる
- ◇ハンモック
  - ・揺られていたい人は長い時間のっている
- ◇木のおうち  
(1回目)
  - ・あまりしない
  - ・木をどう組んでよいか分からない様子だったため、教師がきっかけ作りをする
- ◇木のおうち  
(2回目)
  - ・女の子がほとんど
  - ・三角テントを作る→布をかける→布の端に石を置いて重しにする
  - ・中に入っておうちごっこを楽しむ
- ◇滑り台
  - ・1番人気だった。
  - ・固定してあるロープをつたって登っていく
  - ・人気だったのでロープに人が群がる←教師の声掛けが必要
  - ・初めは滑ろうと思ったタイミングで手が離れてしまう子もいたが、回数をこなせば上手くすべれるようになる。
  - ・斜面は平らではなく、デコボコしている場所もあったので、子どもたちはバウンドを楽しんでいた。
- ◇生き物探し
  - ・カエルがいることが分かると虫好きの子はカエル探しに夢中になる
  - ・「ようちえんにもってかえりたい」という子がいたが、「ひみつのもり」の生き物は持ち帰らないという約束をする←「またあいにくるね」と期待できる
- ◇綱ハンモック  
(2回目から)
  - ・4本の木にロープを結び綱をつける
  - ・1つの木のところにロープを1本つけておき、それをつたって登る

- ・木登り好きな子はスイスイと登る
  - ・定員は3人
  - ・網の上で寝転がったり、跳ねてバウンドするのを楽しんでいた
- ◇倒れている木
- ・倒れている木の上に立って乗って遊ぶ
  - ・小さい木を持ってきて木を削る（イメージは大工のよう）
- ◇ごっこあそび
- ・石を集めて焚火
  - ・苔のついた土を丸めて焼きおにぎり
- ◇土粘土
- ・沢の土を触っていたら土粘土の感触！
- ◇冬イチゴ
- ・あそびエリアに冬イチゴがなっていて、食べても大丈夫かどうか調べて食べてみる
- ◇お絵描き
- ◇不思議な形の木
- ・木の汁がたくさん出るようにいっぱい削って、その汁で絵を描く
  - ・手にはめたり、持ったりして遊ぶ

年中組はある程度教師が設定した遊びの中で遊んだ。全体的に運動能力が高い子が多く、どのあそびにも抵抗なく遊びに挑戦していった。しかしその中で、危険予測ができず怪我をしかねないこともあったので、事前の声かけなども必要であった。果敢に挑戦する姿は、他の子への刺激にもなり、できるようになったことをみんなで喜びあえることもできた。ごっこ遊びでも友だちとのやりとりが深まる時期でもあるので、おもしろいな、楽しそうだなと思ったことを共有している子たちがいた。

### 《2018年度 年少組「ひみつのもり」実践記録（1回目 11/21、2回目 11/30）》

- ◎子どもが準備&用意したもの・・・軍手、手ぬぐい(結んで登園してもらう)、長袖長ズボン
- ◎保護者へ・・・手紙を配布（軍手や手ぬぐいの必要性、マダニチェックのことなどを伝える）
- ◎園が準備&用意したもの・・・年中組と同じ
- ◎あそびエリアでのあそび・・・網ハンモック、おうちごっこ、綱渡り、横たわっている木  
植物や木を使ってごっこあそび、滑り台、沼
- ◎それぞれの場所での子どもたちの様子
  - ◇滑り台
    - ・ブルーシートは使用しなかった  
(スタート地点のロープを頼りにするのが難しい)
    - ・ロープを使わないで登る方法を伝える
    - ・土の上をそのままおしりで滑る
    - ・楽しみが分かると汚れを気にせず何回も楽しむ
  - ◇家づくり
    - ・年中組が作って置いていたのを見て、真似して木をたしていく
    - ・中に入れること知ると喜ぶ

・木を鍵に見立てて遊ぶ

◇網ハンモック ・1点を木から外し自分で登りやすくする（4点→3点）  
・1回目はあまり遊ばなかった  
・2回目は遊ぶ子が増えた

◇綱渡り ・園にもある遊具なので、どの子も普通に遊ぶ  
・2回目になると遊ぶ子が増えた

◇横たわっている木 ・平均台のように歩く（低い木も高い木も）  
・馬乗りになって楽しむ（教師が揺らす）

◇ごっこあそび ・杉の木でシャワー  
・キツネの顔そっくりの木を見つけそれを木の穴に入れ、  
ペットとして飼う  
・杉の枝に木を差し込んで家だった所を焚火と見立て、おもち焼きごっこ  
・木の穴におぼけがいる！

◇大工さん ・年中組と同じように倒れている木を削って遊ぶ  
◇土ねんど ・年中組と同様に触って遊ぶ

◇沼 ・はまって遊ぶ  
・汚れた軍手を「せんたくやさん」といって洗ったりして遊ぶ

年少組は年中組が遊んだ後のフィールドで、おうちの形がそのまま残っていたような環境だったこともあり、また年齢的なこともあるのか、滑り台、斜面登り、ハンモック、網などに加え、様々なごっこあそびが盛り上がっていた。神様がくださった大自然ということもあり、帰り際には「かみさまありがとー！」と山に向かって叫んで帰る子の姿も見られた。

軍手、手ぬぐい等「ひみつのもり」に出かけるにあたり、管理や装着の面では時間がかかるという難しさも感じたが、経験を重ねた後の年長期の姿は今から楽しみである。

◎山登り ・フィールド内の山に登る  
・子どもの足で20分程度で登ることができる  
・登る道、下りる道にリボンをつけておく（木に結んでおく）  
・2018年度年中組 2回全員で登る  
3回目以降あそびエリアで遊びながら、登りたい人が登る  
・2019年度年中組 1回全員で登る

しっかりと足を踏ん張り、手をついて石や根っこを持ちながら頂上を目指して登った。昨年度の年中組は秋が初山登り、今年度の年中組は7月が初山登りということで安全に登れるかな？と心配もしたが、登る前には「ゆっくり行くこと、走らないこと、怖い場所はしゃがんだり手を使うこと」などを伝え、子ども自身が良い意味で緊張感を持って登れるようにした。先頭集団は自分たちだけどんどん先に行くのではなく、後ろと差がついたら待ってあげたり「がんばれー！もうちょっとだよ」と声をかけてあげたりしながら登り、全員で頂上まで登れたことを喜び合う経験もできた。

《教師研修会》

◎フィールドに行き自然体験、ネイチャーゲーム（2017年11月）

◎入林手続き（2018年4月）

◎岡田さんとの散策（2018年5月）

◎あそびエリア整備（2018年6月）

◎山登りエリア整備（2018年9月） リボンつけ

◎DVDの教材を見て勉強（2018年11月5日）

① 「知っているだけで強くなるリスクマネジメント」

- ・その人の持っている能力によってリスクは変わる
- ・すべての専門家になりえない
- ・情報を持っているだけでリスクは軽減できる

② 「動物・植物のリスク」

- ・意外と身近なところにリスクの高い動植物が生息している
- ・どのようなものが生息しているかは、地域性によって動植物の種類に違いがある

③ 「環境リスク」

- ・事前の情報収集
- ・職員の中でリスクがあることかどうかシェアする

◎フィールドに行き危険箇所のチェック&整備（2019年6月17日）

- ・斜面ロープ・・・子どもようすを見て、子ども自身が登れるか登れないか判断が難しかったり、教師が付きっきりで見えていないといけない状況があり、最初に登っていた方は難しいと感じたため、比較的簡単に登れる斜面を見つけた
- ・斜面ロープ→山登りの平らなところ→フィールドに戻る道・・・戻るところの道が不安定だったので整備した
- ・教師は最大4人いること
- ・フィールド内の地図の必要性（今後子どもたちと行った活動エリアを書き込んだり、教師間でその日のあそびの様子を伝えたり、危険箇所のチェックをするときに利用するため）

#### （4）反省と考察

「ひみつのもり」での活動を始めて1年が経とうとしている。子どもたちは今まで以上に自然の中で遊ぶことに対して意欲的になり、一方今まで抵抗があった子も、土に触れたり、歩いたり、汚れたりすることに少しずつ抵抗がなくなってきた。教師自身がどんなあそび場にしたいのか、どんなことをしたら子どもたちが楽しめるのか、思いを持って保育をすることが、子どもたちの生き生きとした遊びに繋がると考えている。いまだにフィールドで遊ぶ子どもたちの様子を知らない教師もいる。その日の教師会などで様子を伝えながら、今後数年かけて情報伝達、共通理解を続けていくことが大切だと感じている。「ひみつのもり」でのあそびはまだまだ始まったばかりのため、これからも教師の資質向上をはかっていくこと、子どもたちがよりいっそう自然の中で心と体を開放させていって欲しいということ、自然が私たちにとって素敵な場所であり続けることを愛真幼稚園は心から願っている。

#### （5）今後の課題

○教師の配置、あそび設定の数、その日の地面のコンディションなどを見て「今日は山登りはおやすみ」と、教師が総合的に判断することが大事な場合もあるため、楽しく遊ぶために危険予測を引き続きしていくこと。

○教師の自然に対する知識を増やし（虫や植物の名前、怪我をした時の対処法など）、定期的にフィールドに行きあそび場をチェックしたり、様々な自然環境に出かけて知識を増やすなど、園内研修をする必要があること。

○保護者の安心感を得たり、より服装のイメージができるように、どんなところで、どんなあそびをしているのか、写真などをおたよりに載せて、保護者に伝えていく必要があること。

○山登りや、斜面登り、綱ハンモックを通して、踏ん張ったり、しがみついたり、ロープに掴まるなど、全身をつかうことが増え、体力がついたように思う。園庭では高いところに登ろうとしたり、教師が考えつかないようなあそびをするなど、子どもたちの姿に変化が出てきた。そのため、引き続き様々な自然環境の場に出かけると共に、園庭の環境も変えていく必要があると考えている。

## 2 研究討議

### (1) 発表内容に対する質疑応答

Q…フィールドは園から歩いて何分くらいの場所なのか？また、いろんな環境があるなかでなぜ森に行こうと思ったのか？

A…歩いて25分、バスだと5分ほどの場所にある。時と場合、また学年によって、行きは歩いて、帰りはバスで帰るなどにしている。遊ぶ時間も確保したいため、年少児は行き帰りバスにしている。

改めて聞かれると、なぜ森を選択したのか理由はなんだろうと正直思ってしまったところもある。園舎を17年前に建て替えたのだが、それまでの園庭は固定遊具に草が少し生えているだけの殺風景な園庭だった。園舎を建て替えるにあたり園庭を森化しようという話が教師の間で出てきて、そのことがきっかけだと思っている。園庭の真ん中にクスノキを植えたり、他にもたくさん木や花を植えたり、池を作ったり、園庭のなかで自然に触れることを目指してきた。何もない殺風景な園庭の時の子どもたちよりも、自然が豊かになってきた園庭で遊ぶ子どもたちのほうが「わあ、たのしそう！」「これがあるね、あれがあるね」とより主体的な姿に変わってきたことを感じている。もっと園庭を変えていきたい気持ちもあるが、園庭だけでは限界があることも感じている。それなら近くのフィールドを探すこともありかもという発想がでてきた。自然のなかでは子どもたちの主体的な姿がよく見られる。子どもたちが「あれしたい！これしたい！」と主体的に遊ぶことで、身につく力がたくさんあると思う。そのことが森へ行く魅力だと思っている。

Q…ちなみに冬も行くか？

A…今年の冬はあまり雪も降らず、昨年度の年中児を連れて行った。森の中は木がある程度寒さから守ってくれて、いい環境のなかで遊ぶことができた。雪が降った状態ではまだ行ったことがないため、危険の有無を教師が確認したうえで行くのもいいかなと思っている。

Q…繰り返し森へ行くなかで、ブルーシートやロープなどのしかけをしたりしているが、それはどの程度常時設定しているのか？また、「今日はでかけよう」「今日はやめておこう」という森へ行く判断はどの時点でしているのか？

A…お借りしている山なので常にものを置いておくことができないため、園から毎回持って行っている。学年や一緒に森へ行く職員によって設置するものも変えている。1 番最初に森へ行くときに、子どもたちが森でどんなあそびをするのだろう、遊べるかなと半信半疑な部分もあり、こちらがブルーシートや滑車などを取り付けてみたところもある。だが、あそびを設定しなくても、自然に落ちているものやぶら下がっているものなどでイメージをわかせてごっこ遊びをしたり、何かを拾ったり捕まえたりすることに夢中になり、あそびを広げている。今回の活動で子どもってやっぱりすごいと感じたところである。

また森へ行く判断は、前日大雨が降ったり、長雨が続いた時はなしにすることもある。バラッと降った後などは森の状態がわからないため、その日の朝、副園長が森のようすを見に行き、そこで判断している。森のコンディションによっては、山登りだけ、フィールドだけで遊ぶなどと、あそびエリアをどちらかだけにすることもある。

Q…森へ行くことの保護者の反応やどんな声があがっているのか？

A…毎週火曜日は園外へ遊びに行っていて自然に触れているため、ひみつの森へ行くことに対して特別な反応があるわけではないが、お迎えの時に子どもたちの汚れた軍手や服を見て、「今日もたくさん遊んだんだね！楽しかった？」などという声がある。また、安心感をもって保護者の方に送り出してもらいたい気持ちがあるので、手紙等でよくわかるように発信を続けていったほうが良いと思っている。森へ行くときの服装も、なぜ長袖が良いのかななどを保護者の方に十分に伝えていくことが大事だと思っている。万全な準備をして行っているから楽しめるということ、今は理解してもらえていると思っていて、そのことは今後も発信し続けていきたいし、教師も知識を増やしていき、保護者の方の一層の理解をもらいながら楽しい保育にしていきたい。

## (2) フィールドワーク

幼稚園の園庭を使って、ネイチャービンゴを行った。5×5のマスがあり、横には幼稚園に生えている植物や植えてある木、生き物を見つけたり、捕まえたりするお題が44個書いてある。その中から24個のお題を選び、それぞれがビンゴを目指した。この日は携帯電話で調べることがなしとし、幼稚園に置いてある園庭マップや図鑑などで調べてもらった。

園庭の池にいるメダカをタモで捕まえるのに必死になっている方がおられたり、ミントやレモンバウムのおいをかぎながら「これこれ！」と探しておられたり、セミの抜け殻を見つけて「あ！あったー！」と喜んでいる方がおられたり、夢中になって遊んでくださった。

## 3 指導助言

幼稚園教育要領で“自然”が取り上げられている。「自然に関わる活動を大事に」ということである。一方で、家庭・地域との連携でも、自然と関わる活動については触れられている。近所の自然公園など、自然の中も活用していくことの必要性も書かれている。自然の中で、という言い方をしているが、2つが全く別なものではなく、連続しているものである。自然と関わる活動、自然の中での活動をしていくことが大事にされている。

県の取り組みとして、いわゆる森の幼稚園に対する支援援助の開始を始める、と言う、全国的に見ても珍しいことがあった。その一方で、森の幼稚園ではない既存の園に対しても自然保育を推進する支援をしていこうと、自然保育認証制度が作られた。認証制度の現状を調査するアンケートを昨年度末に実施した。認証を受けている園の8割が活用できていると回答があり、保育に対する見直しや安全管理などの契機となっているようだ。一方で、補助金を使う時のしほりがあったりもするので、利用が難しいと感じている園もあった。だが、認証を受けていないほとんどの園が、実はそもそもその制度自体を知らなかったという実態も

分かり、広報の必要性がある。どの園でも自然保育を実施することを好意的に感じているが、中には認証制度を受けていなくても積極的に取り組みをしているという園もあった。認証を受けている、受けていないに関わらず、その取り組みについて共有したり情報発信したりしていくことが大事だと思っている。

今回保育に立ち合った中で、ハンモック、ターザンロープ、ビニールシートを使った滑り台などいろいろあった。そのままの自然ではなく、そこにプラスして先生方が設定した人工的なものを加えた中での活動があり、一方で自然そのものと関わっている活動の両方があった。例えば、ターザンロープ、ハンモックなど、気持ちや身体感覚を開放するような遊びは、先生方が安全のために作られたものに身を預けて不安定さを楽しむものである。一方で、自然と関わる時は、ものすごく子どもたちが集中する。なぜなら自分が怪我してしまうかもしれないからである。基本的に自然は人が作り出したものではなく、不確定なものだが、その中でも子どもたちは安定を見出し進んでいかなければならない。ただ、その真ん中もある。それは創造的な活動である。先生方のされた働きかけがきっかけだったりもするのだが、いかに自然のものを取り入れながら自分の作りたいもの、やってみたいことを形にしていくか、ということもある。もちろんそれぞれに子どもたちがやろうとしていることだったり、その中にもリスクがあったりもするので、それに応じて先生方も動いていかないといけない。

### 自然の中での身体の使い方、斜面について

#### ○無規格が育む自然との付き合い方

- ・人工物は使用者（多くは大人）に応じた規格があるが、自然の状態は千差万別  
→場が持つ意味は身体の高さや機能で変化

#### ○小さな状態の違いがもたらす影響

- ・ステップ有：身体は鉛直に対し垂直に
- ・ステップ無：身体は斜面に対し垂直に  
→腕の伸縮、重心移動（大人との差異）の調整

#### ○経験の積み重ねと危険メタの理解

- ・環境の特性とその危険を全身の感覚でスモールステップの繰り返しの中で学ぶ  
→状況に応じて子どもが自分で危険を判断

### みんなで山登りをする活動

- ・集団で山登りは、基本的に全員で一本道を通る  
||  
・困難さが伴う道をとともに登るという共通の体験になる



- ・登る際の頑張りや工夫、登る過程での気付き、たどり着いた際の達成感などの共有
- ・先に行く者と後からついていく者という関係性が自然発生  
(両者の間で育まれる助け合いや労り合いのやり取り)
- ・独立したねらい・活動内容      ・保育者の立ち位置には注意

### 自然の中での保育者の立ち位置

- ・場の状況は千差万別  
→多様な活動~リスクの内容
- ・木々の茂みや起伏のある地面  
→死角が生じやすい環境
- ・場の状況、経験量、活動時間の推移  
(~疲労)が生み出す  
→子ども間の動きの緩急の差



- ・俯瞰的な空間認識の必要性
- ・偏在しない保育者の配置  
(一本道は動きの緩急の差が生じやすい)
- ・保育者間の意思疎通の確保
- ・活動状況に応じた役割の変化

☆子どもの状況を踏まえつつ、  
誰がどこで何の活動を見るのか  
※必要に応じて保護者の力も必要

- マップを作り事前に環境を知ろうとすることは大切だが、  
実際の形状、植生状況との差異に留意

### 自然と正しく付き合う上で大切にしたいこと

- 子どもも保育者も必要な自然への畏敬の念
  - ・人間中心でない環境を“おそれうやまう”  
→常に何らかのハザードが存在する場
  - ・怖さを正しく知り、判断する力を培う  
→身体感覚を通じた経験が培うリスク管理
  - ・未知なるものへは誰しも警戒心が働く  
→“慣れ”が最も危険な状況を生む
- 専門的な助言、第三者的な視点の必要性
  - ・人は自分が知っていること(分かっていること)に目が行く(落石危険の事例)
  - ・自然の状態は、天候や季節によって刻々と変化する(地にむき出しの根の事例)
  - ・保育実践上の安全対策と自然体験活動での安全対策の相違点を十分踏まえる

先生方は保育のプロフェッショナルだと思う。先生方も研修を受けてどんどん自然の知識を蓄えられておられるところだと思うが、また一方で、常に第三者的あるいは専門家助言も同じように日常的に受けられるようにすることも必要になるかと思う。先生方にもより良いより楽しい自然保育を実現していただけたらと思う。



